

## Lighthouse Internationalの活動とミッション - 視覚障害児を支援するリハビリテーションサービス機関 -

新井 千賀子

国立特殊教育総合研究所  
視覚障害教育研究部 弱視教育研究室

### はじめに

感覚障害である視覚障害は、感覚を補う補助具の活用、歩行・日常生活の技術の訓練の他、読み書きのための点字やコンピュータ等の活用は学習や発達を支援するための前提となるものである。我が国ではこれらの技能や技術についての指導は盲学校や弱視特殊学級・通級指導教室で通常の教科学習に加えて自立活動の時間等において行われている。近年、障害児の学習の場が多様化が進み、視覚障害児も通常の学級に在籍して学習しいく可能性がでてきている。このことはもちろん、どの場で教育を受けてもそれぞれの子どものニーズを満たすための取り組みがなされることが前提となって行われているもので、多様な取り組みがおこなわれている。だが、視覚障害のある乳幼児や子ども達は他の障害にくらべて人数が少ない。したがって学習の場の多様化に伴って広汎にさまざまな教育の場に視覚障害のある乳幼児や子ども達が点在することが予想される。この場合、前述のような障害に特化した技術や技能の学習の機会を彼らにどのように提供していくかが課題となっている。

筆者は、文部科学省の在外研究員としてニューヨーク州ニューヨーク市にあるLighthouse InternationalのArlene R. Gordon Research Instituteに滞在する機会を得、Lighthouseが開発中のプロダクトに関する研究活動に参加しながら、Lighthouseで行われる視覚障害児へのさまざまな活動について触れる機会をもった。

IDEA (Individual with Disabilities Education Act : 個別障害児教育法) によって、最も制約の少ない教育環境を保証すること (Least Restrictive Environment: LRE) としているアメリカでは通常の学級に視覚障害のある子どもたちが多く在籍している。また、教育以外の機関でも障害児への様々なサポートの形態をもっている国である。その国の中で、Nonprofit Organization (NPO) であり世界の視覚障害者のために活動をしているLighthouse Internationalが教育との関係のなかでどのような役割をになっているかということは、今後の我が国の特殊教育をすすめていく上で参考になることである。ここでは、教育機関ではない視覚障害児をサポートする機関が教育との連携のなかでどのよ

うな役割を持つ可能性があるか、その1つの例としてLighthouse Internationalが我々が示唆することを考えていきたい。

### 1. Lighthouse International

Lighthouse International (以下ライトハウス) は1904年に創設された視覚障害者を対象としたリハビリテーション、教育、啓発活動を行うNPO機関である。"ライトハウス"という名称の視覚障害関係機関は世界各地にいくつもある。ライトハウスとこれらの機関は経営的な関係はないが同じ視覚障害を対象とした機関ということで積極的に連携をおこなっている。ライトハウスにも日本ライトハウスからの訪問の記録などがのこっていたし、アメリカ国内の同様の機関の交流が随時おこなわれていた。所在地はニューヨークマンハッタンのミッドタウンとアッパーイーストの間にありかなり条件のいい場所である。本部ビルディングはADA法 (Americans with Disabilities Act) に基づいて建設されており障害者に対応した様々な工夫がされ、施設そのものがバリアフリー建築の一つのモデルとなっている。

ライトハウスが行っている事業は多岐にわたっている。中途視覚障害者のリハビリテーションだけでなくadvocacy, サービス提供者の育成・教育、学齢期の子ども達への支援サービス、乳幼児への教育、視覚障害に関する研究・製品開発また国際協力なども行っている。これらの事業についてはライトハウスのミッションとして明確に位置付けられている。我が国のこのような機関は厚生労働省管轄であることや学齢の子ども達は特殊教育のサービスを受けていることから、中途視覚障害者を対象としたサービスが中心になる。ライトハウスが学齢期を含めた乳幼児から老人までを対象としたサービスを中途視覚障害者へのサービスと同列にあついている点は、我が国の同様な機関との違いである。

### 2. ライトハウスの活動とミッション

ライトハウスは1994年に設立当初からのミッションを再

確認し設立当初から持つ付けた理念をさらに明確にし、『To overcome vision impairment for people of all ages through worldwide leadership in rehabilitation services, education, research, prevention and advocacy.』として  
いる。このミッションは世界の視覚障害のある人々の為に活動するとして、視覚障害についてのリハビリテーション・教育・研究・advocacyをアメリカだけでなく世界のリーダーシップをとることをかけている。このミッションを反映して、ライトハウスではInternational Low vision conference "Vision'99"の開催や開発途上国での視覚障害リハビリテーションのサポートなど国際的な活動を積極的に行なっている。ライトハウスにくる研修者は国内だけでなく、同様の機関をつくろうと考えているさまざまな国の機関の職員、新たにロービジョンクリニックを始めようとしている医師やオプトメトリストがライトハウスのスタイルを学ぶために滞在していた。私が所属した研究部門では積極的に他国からのリサーチレジデントをうけ入れ国際交流をはかっていた。さらに、こうした諸外国からの研修者や見学者、研究者を活用してLearning exchangeとして講演や研究報告会（これらの多くはランチタイムにわりとカジュアルな形でおこなわれていた。）を依頼し、積極的にお互いの情報を交換する場を設けていた。ライトハウスはinternationalという名のとおり国際的に活動している機関であり、世界の人々にたいして開かれた機関である。

### 3. Lighthouse Internationalで行われているサービス

ライトハウスが提供しているサービスは多岐にわたっている。成人を対象としたサービスは生活自立のためのリハビリテーションサービスが中心である。我が国と同じように視覚障害者の人口は老人が多くを占めている。そのため、ライトハウスの利用者の殆どは高齢の中途視覚障害者である。ライトハウスにはオプトメトリストによるロービジョンクリニックがあり、リハビリテーションサービスをうけるまえには必ず医学的なチェックやロービジョンケアの前提となる諸検査が行われる。学齢期および学齢前の子どものについては、余暇活動、学習支援、乳幼児からの早期対応がおこなわれている。余暇活動としては、音楽教室やサマースクール、学習支援としてはパソコンの使用や図書館の利用がある。また、本部2階にはプレイルームや屋外テラスのある6才までの乳幼児を対象としたプレスクールがある。ここではIEPをもっている単一および視覚障害が主たる障害の重複障害児と健常児と一緒に学んでいる。

また、サービスの提供だけではなく視覚障害者にサービスを提供する側の育成・教育にも力をいれている。視覚障害に関する講座は有料であるにもかかわらず多くのパラメ

ディカル、医師、オプトメトリストが受講していた。内容も豊富で、補助具についての理論的な講座からサービスのマネジメントに関する講座などサービスの提供に関する広い範囲の内容の講座が設けられている。さらに、開発途上国における視覚障害リハビリテーションの発展の支援のためのプログラムも行っている。

#### 3.1. リハビリテーションサービス

ライトハウスの利用者は他のクリニックに主治医がいても、利用者はかならずライトハウスのロービジョンクリニックを受診する。これは、自分達のサービスに責任をもつためであるという説明を受けた。ロービジョンクリニックは成人はもちろん乳幼児のサービスも行っており、乳幼児専門のオプトメトリストがロービジョンケアを担当している。このサービスは後述するプレスクールにいる幼児のサポートも行っていた。利用者はロービジョンクリニックによって視機能の検査を行ったあと、必要な補助具の選定とその使用のトレーニングを受ける。こうした基本的なロービジョンケアの他にリハビリテーションサービスとして、読み書きや調理などの日常生活や歩行訓練、コンピュータ使用の訓練などが個人のニーズに応じて行われる。点字の訓練も行われているが、利用者が高齢者であることやロービジョンが多くなっていることからコンピュータなど他のアシスティブテクノロジーによって読み書きを補助していることが多いとのことだった。特徴的なことは、日本における視覚障害者リハビリテーション施設の訓練メニューは全盲者を中心に組まれていることが多いが、ライトハウスは全盲者だけでなく増加しているロービジョンに対応した訓練が充実している点である。日常生活訓練では、ロービジョンの見やすさに対応したキッチンがあり（扉と取っ手のコントラストをはっきりさせ見やすくするなど）ロービジョンが使いやすいように視覚的に配慮された道具によって料理の実習ができる設備などもある。また、コンピュータについても音声だけでなく拡大ソフトウェアを使用してコンピュータの使い方が実習できるコンピュータ室などがある。歩行やその他の訓練も利用者がロービジョンであることを前提に考えられているものが多くあった。

#### 3.2. 教育研修サービス

視覚障害に関するサービスを提供している人を対象に技術/理論の双方からの講座を有料でおこなっている。この講座は、受講者の資格（医師、オプトメトリスト、歩行訓練士など）によって、受講できる講座が決まっているが視覚障害者へのサービスを行っている機関に従事している人ならほとんどを受講できる。滞在中にいくつかの講座を受講したが、基礎的知識があることを前提とした講座でハイレベル（大学院修士課程レベルと思われる）の内容が用意

されていた。講師もライトハウスの職員（Ph.D.所有者）だけでなくニューヨーク州立大学のオプトメトリス養成大学や医学部の教授であった。講座は内容によって1日から5日間程度で、必ず理論とディスカッション、実技の時間が組まれている。受講者はアメリカ国内だけでなく諸外国からも訪れていた。

### 3.3. 図書館

#### 点字 / 音声図書の貸し出し / 朗読サービス

図書館では録音図書や点字図書の貸し出しのほかにボランティアによる朗読サービスが行われている。朗読サービスは、書物および学生の教科書や手紙など利用者の要望に応じてボランティアが代読するものである。防音設備のあるブースがもうけられていて、読まれている内容は外にもれないようになっている。また、プライバシーを守るためにボランティアはライトハウスの研修を受けたひとが行っている。貸し出される図書の多くは録音されたものであったが、拡大文字の図書や雑誌も多くみられた。雑誌の中には本誌を拡大文字で印刷したものが発売と動同時に販売されているとのことだった。老人の人口が増えていることから拡大文字版の出版には雑誌社にもメリットがあるということだった。

### 3.4. 余暇活動のサービス（音楽教室など）

#### ・音楽教室

ピアノや弦楽器 / 管楽器などを視覚障害児を対象にレッスンをおこなっている。貸し出し用の楽器が用意されていて楽器を買うまで借りることができるサービスがある。レッスン室は日本のちょっとした音楽教室以上に充実していた。ここのオーケストラは年に何回かライトハウス内にあるホールで演奏会をひらいている。

#### ・ダンススタジオ

音楽教室と同じフロアに、大きな鏡がついているダンススタジオがある。この鏡は視力が低くても自分がダンスをしている姿を確認できるように、大きくうつるように作られている。

### 3.5. 子ども達のためのサービス

視覚障害児は人数が少ないため、通常学級に在籍していると自分と同じ障害のある友達に出会う機会が少なく孤立感を得やすい。ライトハウスではニューヨーク州の盲人および視覚障害者のための委員会（the New York State commission for the Blind and Visually handicapped: CBVH）からの助成で夏休みのあいだにサマープログラムを開催している。このプログラムは比較的年長の子ども達を対象とした1) Youth Transition Program 2) Youth Employment Program と4年生から8年生の子ども達を対

象とした3) Camp Breakaway, 視覚障害だけでなく視覚障害と発達の遅れのある子ども達を対象とした5) Career Training がある。どのプログラムも、学校教育終了後に社会に出ていく準備と心理的なサポートを基本としている。学校教育の枠組みでは行えない部分をこのサマープログラムでになっている。

#### 1) Youth Transition Program :

14才から18才の子ども達を対象に、合宿形式でおこなわれ大学や就職への準備を行うプログラムである。コンピュータや視覚障害に対応した機器の活用を学ぶだけでなく、プログラムをとおして自分自信の能力に自信をもちアイデンティティを形成することを支援の目的としている。

#### 2) Youth Employment Program :

このプログラムは、視覚障害のある子ども達が地域でアルバイトの経験をとおして、将来の就労について具体的なプランをもつことを支援するものである。

#### 3) Camp Breakaway:

4年生から8年生（9才から12才）を対象とした読み書きに関するプログラムである。このプログラムの最大の特徴は視覚障害のある子ども達と同じ学校の視覚障害のない友だちと一緒に参加することである。障害の有無にかかわらず一緒に視覚障害に対応した読み書き（点字や拡大文字などの読み書き）を学習し最後には読んだ本の物語りを劇におこして演じることになる。このプログラムについては、ニューヨーク市の教育委員会と共同で行われている。

#### 4) Career Training

就労に向けてのトレーニングの一つとして、社会活動、芸術活動などの余暇活動などについてのプログラムである。このプログラムは発達におくれのある視覚障害児も対象としている。

### 3.6. 乳幼児の就学前指導

視覚障害および重複障害のある子ども達と障害のない子ども達の就学前指導がおこなわれている。特殊教育の資格をもった教員、ST、PT、OT、オプトメトリスト、補助教員などの専門職が配置されている。また、スペイン語を話す子ども達のためにESL担当者が配置されている。教職免許のある教員だけでなくさまざまな専門職が係わっている点は日本の盲学校の幼稚部と異なる点である。また、このサービスはニューヨーク市がおこなっている視覚障害児のearly interventionのサービスとも連携がとられていた。我が国の盲学校では視反応がない重度重複障害の子ども達が在籍していることがあるが、在籍していた重複障害児は視覚障害が主たる障害で、肢体不自由があったり知的障害がある子ども達であった。

### 3.7. 研究

研究部門は、視覚研究の部門と社会学/心理学をベースとした研究を行っている部門にわかれている。視覚研究の部門では、ライトハウスのプロダクト開発などの視覚障害に関連した基礎研究などが行われている。我が国では視覚障害については応用研究が中心とされライトハウスのようなサービス機関においては基礎研究があまり盛んではないが、ここでは一つの部門を設けてかなり力をいれていた。基礎研究というと臨床からかけ離れた印象をもたれがちであるが、ライトハウスで行われている基礎研究は視覚障害者に対応した製品や臨床応用を最終的な目的として設定されている。例えば、ロービジョンの場合コントラストの強調や読みやすい文字フォントの使用は読書の効率をよくする。コントラスト感度をより簡便に迅速に測定し補助具の選定に結びつけるか、どのような字体を使用すれば読速度が向上するかなどについて基礎データを実験で収集し、vision scienceの観点から分析を行い応用へ結び付けている。また、アメリカならではの研究としては、視覚障害者の自動車運転についての研究があった。日本では、視覚障害があると運転は即座にあきらめることになるが、国土が広大で自動車社会のアメリカでは運転ができないということは本人の生活の質をかなり下げる。そのため州によって基準をもうけ、ある程度の視野欠損や視力低下であれば運転免許がとれることになっている。どの程度の視力低下や視野の欠損ならば自動車の運転について危険が回避できるかなどについてもシミュレータをつかってデータをとり臨床応用へ基礎資料を作成する。社会学/心理学の研究部門では、障害受容についての研究やライトハウスで提供されているサービスが利用者のニーズに対応し有効であったかを評価する研究などが行われている。

研究の成果は学会報告や論文作成の他に各プロジェクト毎にわかりやすい一般向けに書き換えられた簡単なパンフレット（小さく2～3ページにまとめられ内容を端的にデザイン化し分かりやすくしてある）も作られ研究成果の一般普及に努めている。また、1年1回ライトハウスのボードメンバーにたいして研究成果と進行中のプロジェクトについてプレゼンテーションすることも義務づけられている。こうした外部からの評価と前述した施設の評価を自らの研究機関によって行う自己評価の2本だてて研究やサービスの質を向上させ利用者のニーズに対応した研究活動を推進している。

## 4. ビルディングデザイン

前述したようにこのビルディングはADA法（Americans with Disabilities Act）に従って建設されている。ライトハウスは視覚障害者を対象とした施設であるこ

とから特に視覚障害に対応したユニバーサルデザインを採用している。ライトハウスは自らのビルディングをもってユニバーサルデザインとはなにか、というモデルを示しているのである。このビルディングは健常者のみならず弱視者/全盲者にも使いやすく美しい建物となっている。視覚障害に対応したデザインとしては、照明や音響に配慮があり視覚以外の感覚をつかって移動したり自分の所在地がわかるデザインになっている。また、案内表示もいくつかのパターンが用意されていて、どの人にも同じ情報がアクセスできるようになっている。

配慮の基準は、全盲者には視覚以外の感覚（聴覚/触覚）の活用へ配慮、ロービジョン者には見やすさへの配慮がされている。そして、これらの2種の配慮が行われることで重度のロービジョンへ者はある時は聴覚と触覚、ある場面では視覚を活用するという使いわけが可能になり、あらゆるタイプの視覚障害者に配慮できることになっている。また、視覚障害があることで施設の利用でもっとも困難なことは自分がどこにいてどうやったら目的地にいられるかというオリエンテーション&モビリティの問題である。そのために前述した聴覚、触覚の活用と見やすさのほか、フロアのデザインを各階とも共通にしている。エレベータは音声対応がされどの階かを知らせるほか、上に行くのか下に行くのか、おりたらどちらへ曲がると案内にいくかを必ず知らせてくれる。エレベータをおりると触覚でもわかるように浮き出しの案内盤が設置され自分が行きたい場所を確認できるようになっている。この案内版はさらにロービジョンにも見やすいようにコントラストを上げた表示になっている。さらに各部屋には人の顔よりやや低めのところに部屋番号と名称をコントラストを高くして浮き出し文字でかいてあり、触っても視覚的にもわかるようになっている。この、部屋案内には音声装置がついていて音声を出すスイッチのついた発信機をもって館内をあると必要ところで音声で案内がきける仕組みになっている。照明はエレベータホールと通路、部屋では間接/直接照明の種類をかえて光りの様子で現在地がわかる工夫がされている。また通常、視覚障害者の施設では反響を少なくして聞きやすくする工夫がされるが、ここではエレベータホールだけは逆に反響ができるようにしてホールが分かるようになっている。また、床の素材をエレベータホール、通路、部屋でかえて歩いていてもわかるようになっている。さらに、床は素材と色をあわせ視覚的にもわかるように配慮している。このように、残っている視覚、聴覚、触覚を活用していくためのヒントがこのビルディング全体でおこなわれている。

## 5. ボランティアの参加

ライトハウスではボランティアを管理する部門を設けて、ボランティアの要請を各部署がおこなうと登録者に連絡をとってコーディネートしている。ボランティアはライトハウスで研修をうけており、ライトハウス全体の活動、視覚障害、秘守義務について学んでいる。ライトハウスがボランティアに依頼する仕事はさまざま、見学者の案内や図書館での朗読サービス、館内の受け付けやあらゆるところでボランティアがはたらいている。これらのボランティアは研究機関での実験の被験者なども依頼することができる。わたしは実験の被験者にこのボランティアをたのんだが、マンハッタンという土地柄がアップーイースト（日本でいう山の手か）の比較的裕福で時間のあるひとが多くボランティアをえることは難しいことではなかった（もちろん、ライトハウスの社会的意義を感じての参加であるが）、会社を休職してボランティアをするというプログラムでライトハウスのボランティアをやっている人がいたことには、この国の社会の持つある面での余裕を感じた。

## 6. われわれに示唆されること

帰国してこの原稿を書いている間にも、我が国の特殊教育は以前にもましてより障害のある子どもの個々のニーズに対応した教育的支援を行う考え方に変わってきている。各市町村が認定すれば障害のある子ども達は一般の学校で学習することも可能になった。こうした動きをうけて通常の学級にもさまざまな障害のある子ども達が在籍することが多くなっていくであろうし、障害のある子どもたちが教育を受ける場も多様になると考えられる。これらのことは、通常学級で学習をする障害のある子どもにたいする障害に対応したサポートの方法等もふくめて議論がされている最中である。子ども達へのサポートの質を下げずむしろ向上していく方向への工夫が検討されるはずである。その時に、いまある既存の学校制度だけでなく障害に関連したさまざまなリソースとの協力をしていくことも一つのアイディアではないかと思う。ライトハウスで行われていることは、その一つのヒントになるのではないだろうか。

IDEA において「もっとも制約の少ない教育環境を保証すること」(LRE; Least Restrictive Environment) としているアメリカでは、多くの視覚障害児が通常の学級で学習をしている。そのような環境では教育サービスとは異なるサービスを提供するライトハウスのような施設が担っている役割は大きい。アメリカでは視覚障害に特化したロービジョンティーチャーや我が国同様に特殊教育の資格をもつ

た教員が子ども達のサポートのために存在する。それらの一方でライトハウスなどの機関でも子ども達のニーズに応えるサービスの提供がおこなわれている。このことは、教育と社会福祉両面において子ども達がサポートを受ける機会を十分に増やしている。我が国の状況を考えると、例えば視覚障害のある子ども達の読み書きに関するサポート一つをとっても、それぞれの視力にあった文字の大きさの検討や読むための補助具の指導および点字指導、拡大教材や点字教材作成、などといったことを通常の学級担任が単独で全てサポートしていくのは困難である。また、専門的知識と技能が要求されるようなサポートには専門家が必要となってくる。教育の場が多様化していく場合、その質や量を落とさないためにもサポートを提供する場が多様になりさまざまなところで展開されることは1つのポイントになる。ライトハウスが地域の教育機関と連携して行っているサマープログラムは学校教育の枠組みをこえた活動である。従って、ライトハウスインターナショナルのような日本における社会福祉法人が母体となる機関にも、これまで学校教育がになっていた役割の一部や新たに子ども達を主眼においたサービスが期待されるのではないだろうか。また、逆に視覚障害児を専門に対応してきた盲学校の側も、ライトハウスのような機関のサービスの形態が一つの参考になっていくはずである。そのためにも、教育機関はライトハウスインターナショナルのようなサービスの提供を1つの参考にしなから、一方でライトハウスインターナショナルのような既存の社会福祉施設が子どものサービスについて検討できるような基盤をつくることを要請していく必要があるのではないだろうか。

現在、我が国の視覚障害の世界では学齢期の子ども達は主に学校教育にサポートをうけ、成人の中途視覚障害者は社会福祉施設のサポートを受けている。行政組織や社会基盤のちがいがからライトハウスインターナショナルのようなスタイルをそのまま日本にあてはめるのは難しいことかもしれない。だが、視覚障害という人数の少ない障害のある子ども達に対してサポートの質を向上させながら学習の場を多様化するには教育だけでなく他のリソース（社会福祉資源、医療的資源）との連携・協力の強化が不可欠である。

ライトハウスインターナショナルは世界の視覚障害のある人々の為に活動するというミッションをかかげている機関である。このミッションは、視覚障害児が必要としているものとはなにかを教育や福祉・医療などあらゆる観点から検討し、その実現のためにそれぞれの機関がどのように活動し連携していくかを再度考える機会を我々に与えるものではないだろうか。